

国土づくりを論じるうえで、建築物は景観形成の先導役といえる。長年の設計活動の中で、超高層を始め、数多くの建築作品を手がけてきた建築家の村尾成文氏（日本観光施設協会会長）に、美しい国づくりの在り方について聞いた。



日本観光施設協会会長
村尾成文氏

超高層は「足元」を意識する

人々が集える憩いの場提供

——超高層建築を数多く手がけてきた建築家として、心がけている景観配慮の視点は

日本で高層建築が登場してから、少しでも上に伸ばしたいという意識をもつ設計者が多く、高層化が周辺環境にどれだけ影響を及ぼすかという視点が少し欠けていたように感じている。急速に進んだ都市化において、超高層建築は時代の先取りであつただけに、設計者は上への意識からなかなか離れることができづにいる。

私自身は、超高層建築において、建物の足元をどう形成するかを重要なテーマに位置付けて、設計活動を進めてきた。足元とは、いわば建物の下にコミュニケーションとしての広場を置くという視点である。

——超高層に広場が重要とするのはどのような理由からですか

欧米の超高層では足元の広場という概念はあまり重要視されていないようですが、建築とは周辺環境の一部であって、超高層だからといって、上への意識だけでなく、むしろ横のつながりをそれ以上に意識することが求められるということ。

超高層建築では、経済活動として集客の問題を無視できない。そのためにも足元（広場）から、人を受け入れる最適な仕組みを設定しなければいけない。つまり、人を呼び込むには商業施設を充実させる必要もあるし、単に店を集約するだけでなく、人々が集うコミュニケーションの場として、和み安らげる空間形成が重要になってくる。

国内に超高層建築が数多く存在するが、建築単体で見れば問題なくとも、周辺環境の面的な視点で見た場合、足元（広場）が整っているものが少ないと感じている。

いま、環境問題の深刻化によって、屋上緑化の取り組みを重要視する声が高まっているが、東京に緑が少ないというのは30年前から指摘されている問題であって、本来ならその時から、建築家は意識すべきであったが、実際にはそうした緑化の取り組みをある意味で軽視してきた。

超高層の場合でいえば、屋上緑化は成立しにくく、それだけに足元を緑化することも重要な視点となる。超高層のビル風を計算し、足元の緑化が台無しにならないよう、ただ単に緑化すればいいという問題ではない。その場所性を踏まえた緑化を心がけるべきだ。

——日本の都市計画について日ごろ、感じていることは

都市計画の街区という視点よりも、道路と街の関係性で日本の景観はとても醜いと感じている。言い方を換えれば、都市計画の動線が道路によって分断されている。港町と言われる場所でも、街から港に通じる動線を高速道路が横切り、それが街全体の景観を損なう要因になっている。

行政も事業者も、そして建築家もそれぞれのパートを受け持つ中で、自らに関係している領域だけでなく、さまざまな関係性を意識することが最終的に日本の美しさにつながる。

（日刊建設通信新聞2004年10月22日）